

「感染列島」 ★★★

2008（平成20）年12月3日鑑賞＜東宝試写室＞

監督：瀬々敬久
 松岡剛（救命救急医）／妻夫木聡
 小林栄子（WHOメディカル・オフィサー）／檀れい
 三田多佳子（看護師）／国仲涼子
 三田英輔（多佳子の夫）／田中裕二（爆笑問題）
 真鍋麻美（第一感染者の妻）／池脇千鶴
 鈴木浩介（無名のウイルス研究者）／カンニング竹山
 安藤一馬（救命救急医）／佐藤浩市
 仁志穂（鳥インフルエンザの権威、大学教授）／藤竜也
 高山良三（院内感染対策主任）／金田明夫
 神倉章介（養鶏場経営者）／光石研
 池畑実和（看護師長）／キムラ緑子
 立花修治（真鍋麻美の父、東南アジア某国で働く医師）／嶋田久作
 神倉茜（章介の娘、中学生）／夏緒
 本橋研一（茜のボーイフレンド、中学生）／太賀

2008年・日本映画・138分

配給／東宝

＜カンヌが騒然！パンデミックとは？＞

プレスシートによると、08年5月のカンヌ国際映画祭では、『PANDEMIC』というタイトルの、作品の企画概要を英訳した簡易な一枚のチラシが世界中の映画人に衝撃を与えたい。『PANDEMIC』（パンデミック）とは、

「（病気が）全地域にわたる、全国的（世界的）流行の」。つまり、今日私が観た『感染列島』の英題だ。

感染ウイルスをテーマとした映画は最近多い。例えば、①『28日後...』（02年）や『28週後...』（07年）、②『バイオハザード』（02年）、『バイオハザードII アポカリプス』（04年）、『バイオハザードIII』（07年）、『バイオハザード デジエネレーション』（08年）、③『ドーン・オブ・ザ・デッド』（04年）など。

＜呪われた病気？呪われた国JAPAN?＞

この映画は邦題が『感染列島』、英題が『PANDEMIC』だが、映画の中では日本列島に猛威を振るう新型インフルエンザらしき感染症を、全世界は「ブレイン」と紹介していることがわかる。「Blame」とは、①「blame A for B で＜B（事）の責任をA（人）に＞負わせる、blame B on A で＜BをAの＞せいにする」、②「非難する、責める、批判する」、③「（米俗・方言）・・・を呪う」という意味だから、さしずめこれを邦訳すれば「呪われた病い」。すると、そんな感染症が猛威を振るう日本は、呪われた国ということになる。

戦後63年の間に日本は頑張って戦後復興と経済成長を実現し、ODAはもちろん、日米同盟にもとづく国際貢献も積極的に果たしてきたのに、全世界が日本で発生した感染症を「ブレイン」と呼ぶのは失礼だろうと私は思うのだが、これに対して日本政府や外務省が何ら公に抗議すらしていない姿をみると、まさに現在の内政、外交共に機能マヒしている日本国をみる感じ・・・。

＜対照的な2人の医師が実は・・・＞

塩屋俊監督の『きみに届く声』（08年）には対照的な2人の医師が登場し、あるべき医師論について格好のモデルを提示していた。これと同じように『感染列島』にも、対照的な2人の医師が登場する。一人は、WHO（世界保健機構）のメディカル・オフィサー小林栄子（檀れい）、もう一人はいずみ野市立病院の救命救急医の松岡剛（妻夫木聡）だ。

映画の冒頭に示されるのは、フィリピンの某村におけるWHO部隊によるウイルス感染症患者の救出活動。それをリードするのが日本人医師の栄子。彼女が臨床医の道ではなくWHOに飛び込み、ヨーロッパの医師たちに混じってアフリカの難民キャンプなどで活躍したのは一体なぜ・・・？

他方、日本において高熱、痙攣、多臓器不全という新型インフルエンザの症状をもつ患者を最初に診察したのが松岡。心配そうに付き添ってきた妻の真鍋麻美（池脇千鶴）の前で松岡が下した昨日の診断は、単なる風邪。「2、3日養生していたら治るでしょう。」というものだったのに、その夫が今日は死亡。そんなバカな！そんな想定外の結果をみて、麻美が松岡に対して「人殺し！」と叫んだのはモンスターベイシメントではなく、ある意味当然・・・。松岡はそれに対して何の反論もできないままだったが、これが単なる医療過誤問題ではなく、日本国全体を『感染列島』にしてしまうほどの新型のウイルス感染症患者第1号だったとは・・・。

同じ医師ながらこのように職場も価値観も全く異なる2人の医師が出会うのは、いずみ野市で大量に発生した新型ウイルス感染症の患者がいずみ野市立病院に運び込まれ、その対策のため栄子をリーダーとするWHOのチームが派遣されてきたため。もちろん2人が出会うのは、これがはじめて。誰もがそう思ったが・・・？

＜なぜこんな長い上映時間に？＞

『PANDEMIC』と題した1枚の企画書がカンヌを騒然とさせたのは、①14世紀の黒死病（ペスト）、②19世紀のコレラ、③20世紀のスペインインフルエンザという痛ましい経験をもつヨーロッパ社会が、日本以上にその企画に鋭敏に反応したため。そして多分、普段は危機管理におよそ無関心でノー天気な日本から、そんなビックリするような危機を想定するアイデアが出されたため。

ダニー・ボイル監督の『28日後...（28 DAYS LATER）』（02年）やファン・カルロス・フレスナディージョ監督の『28週後...』（07年）はロンドンで起きた感染症をテーマとした鋭い問題提起作だが、そこで描かれたのは人間の狂気。両者ともすばらしい出来で、私の採点はいずれも星4つ（『シネマルーム3』236頁、『シネマルーム18』364頁参照）。また、その上映時間は114分と104分。それに対して、『感染列島』の上映時間は138分と長い。なぜ、こんな長い上映時間に？

＜二兎を追うものは・・・＞

08年12月4日朝日新聞は、政府は3日、来年度予算編成の基本方針を閣議決定したことについて、「説明なき政策転換」「迷える首相、狙う二兎」との見出しを掲げ、「財政再建の旗は掲げつつ、景気対策のための財政出動に踏み出すという二兎を追う構えだが、二兎とも失いかねない。」と解説した。私の見方では、そんな「二兎を追うものは一兎をも得ず」の格言が、どうも『感染列島』にもあてはまりそうだ。

上映時間が長くなった理由は、第1に栄子と松岡のラブストーリーに大きなウエイトをおいたため。第2に会社員の夫三田英輔（田中裕二）と小さな一人娘を家に残し、いずみ野市立病院内に泊まり込みで感染症患者との格闘を続ける三田多佳子（国仲涼子）の夫婦愛、母子愛に大きなウエイトをおいたため。そして第3に、当初感染症の発生源と勘ぐられたため市民からの非難を浴びて首吊り自殺をしよう神倉章介（光石研）の一人娘茜（夏緒）とそのボーイフレンド本橋研一（太賀）とのラブストーリーまで取り込んでしまったため。

しかし私の考えでは、この3つのラブストーリーの部分は大幅にカットし、『PANDEMIC』の本筋に徹した方が良かったのでは・・・。

＜キーマンは立花医師！ミナス島に注目！＞

感染症の発生という結果には必ずウイルスという原因がある。そこで問題は、それがいつどこで発生したかということだが・・・。

映画前半、いずみ野市立病院の救命救急医安藤一馬（佐藤浩市）が治療中に感染して死亡するなど、いずみ野市立病院におけるパニック模様が描かれていく。WHOから栄子が派遣されてきても、現場の治療にあたるのが精一杯で、原因究明と対策確立にはほど遠い状態。まさにこのままでは日本国は崩壊寸前だ。

そんな中、キーマンとなるのは麻美の父親で東南アジアの某国で医師として働いているという立花修治（嶋田久作）。栄子の再三にわたる問いかけに対してやっとう重い口を開いた麻美は、今思えばお正月に日本に戻ってきた父親が咳き込むなど少し様子がおかしかったうえ、滞在予定を繰り上げてすぐに帰ってしまったとのこと。しかも今、その父親とは全く連絡がとれなくなっているというではないか。こりゃひょっとして、ここに切り口があるのでは？そう考えた松岡の行動は早かった。そして、ここからは東南アジアの某国にある、ミナス島という小さな島に舞台を移してハラハラドキドキの物語が進んでいくからそれに注目！

それにしても、よくぞここまでの行動に踏みきったものと松岡に対して感心すると同時に、一体日本政府は何をやっているの、なぜもっと機動的かつタイムリーな行動がとれないの、という憤りでいっぱい・・・。

＜交通機関閉鎖、都市機能マヒ、日本経済破綻の真の意味は？＞

日本列島のあちこちで新型ウイルス感染症が発生し、次々と死者が出たうえ、その有効ワクチンがないとなれば、日本国全体がパニックに陥ることは明らか。ロンドンにおけるそんな人間の凶気を描いたのが、前述のダニー・ボイル監督やファン・カルロス・フレスナディージョ監督の作品だが、さて日本列島では？

この映画は、交通機能がマヒし、都市機能が停止した東京や大阪などの姿を例示的にスクリーン上に映し出すが、他方では、いずみ野市立病院における医師や看護師たちの奮闘ぶりや前述の3つのラブストーリーを描いていく。しかし、日本が『感染列島』になればパニックは暴動となり、警察官だけではそれを治めることができず、自衛隊の治安出動はもとより、内乱・内戦状態になる可能性すらあるはずだ。

この映画では『感染列島』になっていくことに対して、厚生労働省を中心として「目下調査中」という国民に対する説明がテレビを通じて再三なされるが、『ディープ・インパクト』（98年）においてモーガン・フリーマン扮するアメリカ大統領ベックが直接国民に対して語りかけたような、内閣総理大臣からの国民に対するメッセージは全く登場しない。その意味では、やはり日本政府の危機管理能力とその対処法は現在の麻生内閣と同じように、官僚頼みのその場しのぎ・・・？

そう判断せざるをえないのが悲しいし、『PANDEMIC』という興味深いテーマを設定しながらこの程度の都市機能マヒの描き方では、来るべき危機の全貌と本質をしっかりと伝えたことにならないのでは・・・？

＜2011年はすぐそこに・・・＞

この映画の物語は2011年の正月明けからスタートする。そして、その年の夏は日本列島は数千万人を超える感染者と1000万人を超える死者が発生するという、「あの戦争」をはるかに上回る大惨事に。それは、原因究明が容易に進まず、やっとうワクチンを発見してもその大量投与が可能となるまでには半年を要したから。

日本国は、2008年末の今、100年に1度という未曾有（みぞゆう、ではない）の経済危機にある。そして、格差の広がりや非正規雇用の切り捨てが大問題とされているが、そんな日本でもこの映画が描く2011年の『感染列島』よりはよほどマシ。しかし鳥インフルエンザの人から人への感染の可能性がありうることが明らかになっている今、日本が近い将来『感染列島』となる可能性は十分。さらに、ウイルス以外のバカな政治家、バカな国民によって日本国が事実上沈没してしまう可能性だって・・・。

つまり、この映画が描く2011年はすぐそこにあるということ、私たちはこの映画からしっかりと学ばなければ・・・。